死神のレクイエム

千春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神のレクイエム

【Ｎコード】
Ｎ４３９１Ｐ

【作者名】
千春

【あらすじ】
皆さんは最後の一瞬に何を思いますか？

「えぇ～、貴方は今回、トイレに入ってふんばっていたところ脳みその血管が切れたために死亡してしまいました。死亡時刻は１２月２４日１８時３８分、死亡場所は彼女とデートで来ていたダイアモンドホテルのレストランに置かれているトイレの中、おそらくこれから彼女に告白しようと極度の緊張状態であったために血圧が上昇していたためだと考えられています。以上について何か質問は？」

黒いスーツを着た一人の男が目の前にフワフワと浮かんでいるもう一人の男に淡々と何の感情も感じさせない声で言った。声と同様にその顔も何も感じさせない。

二人がいるのは先ほどの言葉の中にあったホテルの上空、そこからは綺麗な都会の夜景が一望できる。

そんなロマンチックとも言える様な空間にあってスーツの男は異質なものをその手に持っていた、その手には優に２メートルはあるかという大きな鎌、その存在が彼を死神である事を周囲に認識させる。

「何でそんな死に方なん！？もうちょっとマシな感じにしてくれ！やり直しを要求する！！」

「却下します。では質問は無いようなので早速貴方には上の方に行っていただき、閻魔さまの采配を受けていただきます」

「嫌だ！転生を頼む！出来るんだろ！？ＳＳみたいな感じでチート満載でハーレムを作るんだ」

「無理です、それではさようなら」

「ちょっ！まt」
言葉を紡ごうとした男の首をその鎌で死神は刈り取る。その瞬間に男は消え去り、その場には死神だけが取り残される事になった。
その事に何の感慨も感じさせぬまま死神はスーツのポケットの中から携帯電話らしきものを取り出し電話をかける。数コールの後繋がった先からは「はい、こちらオペレーター」という聞きなれたオペレーターである女性の声が聞こえてきた。

「こちらキジ。２１，７０８，９６５，３８８番の魂を送った、次の指示を」

「ではそこから西に2キロほどのところに……」

キジと名乗った男は電話を切ると西へと飛んでいった。

死神とは案内人だ。
死んだ人が天に召される時に迷わないように導く案内人であり管理人。
その風貌は人の歩む歴史と共に進歩を続けてきた、今では人間と同じような服を着て人間と同じような技術の道具を使用して魂を管理する。それを輪廻の輪に加えて新たな生を受けるまでに魂を洗浄し、それが新たな生を受けるまで守るのだ。
魂と言うのはとても繊細なもので簡単に傷ついてしまう、もし長時間放置し続ければ傷付き、運が悪ければ修復不可能になってしまい、輪廻の輪に戻る事も出来なくなってしまう。そうなればもうどうする事も出来なくなり、死神によって排除されるか、悪霊となって現世を彷徨い自然消滅するのを待つかの二択。

人間と言うのは弱い生き物だ。

死神と言うのは古今東西様々な場所に様々な文化に対応して存在している。宗教の観点からみてもキリスト教の人物が閻魔によって捌かれるという事は無いし、仏教徒が天秤にかけられることも無い。様々な文化・宗教・倫理・法に対応するとてもインターナショナルな職なのだ。

キジは目的の場所に辿り着いたのか空中でとまる。見えたのは病院、今回は死んだ魂ではなく”死にそうな魂”。違いが有るとすれば、逃げ出す心配が無くすぐに上に送ることが出来ることくらいだ。

目的の人物を探すとそこに居たのは一人の少女であった。夜、病室の中から近くある窓から空をジッと見詰めている。その目は未だに輝きを保って夜空にある星を眺めていた。

まだ死にそうに無い事を確認するとキジは病室の中へと窓から入り込みその傍の壁に寄りかかる、時間が時間なので周囲は静寂に包まれている。

キジがふと少女を見てみると少女と目が合った。

沈黙。

どちらからも声を発さない、ただただ二人は視線を絡める。

少女の年は8，9というように見える。しかし情報では彼女は病弱らしく身体の成長が著しく遅いのだとか。実際の年齢は１３と４ヶ月、そんなまだ普通ならば中学で仲間と騒いでいるような年のころの少女の身体はやせており、少し触るだけで折れてしまいそうな儚さを感じさせる。

「貴方は誰？」

少女からつむがれるのは明らかに死神であるキジに対して発せら

れた疑問。
死神というのは基本的に人からは見えない存在だ、そもそも質量を持っていないために物をも通り抜ける。そんな存在である彼を見えるというのは死に逝く定めのせいなのだろうか。

「死神さ」

彼は短くそう答えた。
そんな彼の答えに満足したのか少女は「そう」とだけ呟いて視線を再び窓の外へとスライドさせる。
どこか諦めにも似たニュアンスを持った言葉。
そして再び流れる無言の間。

「殺しに来たの？」

「いや、待っている」

再び「そう」という返事。
この短い問答の中に込められている彼女の気持ちは、キジに興味を抱かした。
今までにも少しだけだが彼女のように死の直前に彼の姿を見た人間はいた、しかし彼らはそれだけで狂い、叫んだ。しかし彼女は違う。彼を直視してその存在を認めてもただただ彼女であり続けた。

「私はもうすぐ死ぬのね」

キジは何も答えない。
しかしそれで少女は理解したのか「そう」と呟いた。

どれほどの時間が経過しただろうか。
時計を見ると２３時を指している、すでに到着してから４時間が経過していた。
これはちょっとおかしいと思い携帯電話を取り出すと……

「病室では電話をしては駄目よ」

少女によって注意を受けてしまった。
キジは大人しく従う。
そんなキジを見て少女は「フフッ」と初めて笑みをこぼした。

「ごめんなさいね、しぶとくて」

そこからこぼれたのはそんな言葉。
やはり聞こえてくるのは諦め、だからこそキジは気になった。死ぬのは怖くないのか？と。
たとえ人間どうしては聞きにくいことでも自分は幸いにして死神である、躊躇う必要など無かった。

「怖い、けど楽しみでもある」

帰ってきたのはそんな生きている者ならば考えられないような言葉。
普通生物ならば死ぬことを恐れ、そしてそれを敬遠するものである。
そんな大の大人ですら困難するような回答を彼女はなんでも無いかのように出すことが出来るのだろうか。
キジはもっと興味深くなった。

「”死”だけが私を私として認識させてくれる、その恐怖が私を認識させてくれる。それだけが私が生きていたいと思えるモノだから」

彼女はポツポツと自分の境遇を話し始めた。

物心ついた時には私はこの病室のベットに居た、なんでも原因不明で治療方法も分からないものらしかった。最初はもちろん自分を産んだ親を恨んだ、でもお母さんはそんな私に優しく接してくれたしいつでも気にかけてくれた。

生んだ事をうらんだ私を娘だって言ってくれて、育ててくれた。

私が原因でお父さんと離婚したことも知った。

だからこそ、私はこれ以上お母さんの負担になりたくないんだ、大好きだから。

聞こえてくるのはチクタクチクタクという時計の秒針が鳴らす音ばかり。

少女はそれだけを言うとまた窓の外にある星に視線を戻した。

少女にとっては星というのは万人に平等に手の届かないモノ、だからいつからかそれを見ていることが日課になっていた。そして思い思いに輝いているソレは、まるで一度も手にした事の無い自由の象徴でもあった。

「現世に思い残すことは無いのか」

キジは感じた、時間が迫っていることを。

だからこそ聞いてみた。この死を恐れない少女がこの質問に対してどのような回答をするのかを。

そこで少女は数拍言葉を止める。
短い会話の中で初めて少女は回答することに詰まった。
「一つだけあるとすれば、お母さんにありがとうって言いたい、かな」

「貴方の死因は道を歩いていたらたまたまそこを通りかかったネズミが貴方の目の前に出てきて、それに驚いた貴方は足を滑らせて頭を道端に落ちていた犬の糞に突っ込んだショックによるショック死です。以上について何か質問はありますか？」
「ちょ！そんなのあんまりだろう！？どうにかしろよ死神！」
「無理です。ではさようなら」

人間というのは弱い生き物だ。
簡単に傷つき、簡単に死んでしまう、寿命も短い。
一人では生きて行く事など不可能に等しい。
だからこそ人は支えあい、愛し合い生きていく。
様々なことを考えながら生きて行く。
そんな人間だからこそ、キジはその人間を愛し、いつまでも興味が尽きないのだ。

（後書き）

うおー！　連載を書かずに私は何を書いているのだろうか！？

落ちは期待しては駄目なのですよ？

ちょっと連載にしてみようか悩んだ作品

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4391p/

死神のレクイエム

2011年10月7日00時26分発行